

夏を見上げて。(あさのあつこ)

一 作者と作品について

あさのあつこ（一九五四年～）女性、日本の小説家、児童文学作家。青山学院大学文学部卒、小学校教師を経て一九九一年作家デビューした。本名は浅野敦子、あさのあつことはペンネームで、本名の平仮名書きを取ったものとされる。岡山県英田郡美作町湯郷（現美作市）出身。小説『バッテリー』（教育画劇）にて野間児童文芸賞を受賞。『バッテリー2』にて日本児童文学者協会賞を受賞した。『バッテリー』シリーズにて小学館児童出版文化賞を受賞した。現在は日本児童文学者協会会員である。主な作品は『バッテリー』（全六巻、角川文庫）、『ほたる館物語』（全三巻、新日本出版社）、『テレパシー少女「蘭」事件ノート』（講談社）、『NO.6』（講談社）などがある。作品は漫画化、映画化、ドラマ化されており、また教育分野にも情熱を持っている作者である。「夏を見上げて。」は小学館により出版されたあさのあつこの短編小説であり、中学国語教科書に掲載されている。小学生の一、勇平、恵介の三人の考え方を巡って、主人公の一の心理変化を詳しく描写した文章である。

二 叙述について

椎葉 一勲、鄧 立新

家も、庭も、町も、神社の森も、一自身もこなごなに砕けてしまいうんじやないかと足が震える。

想像しただけで足が震えるほど、一は、雷に対しての恐怖心を抱いているのが見て取れる。

「も」が連続して使われている。この一文が仮に「家や、庭や、町や、神社の森」だと、ただ事実を並列しているだけにすぎないが、「家も、庭も、町も、神社の森も」と、「も」を使うことで、この町が、一にとって親しみのある町だという印象を与える。たとえば、「A君やB君やC君が来ていたよ。」だと、並列的で事実の列挙という印象を与えるのと、「A君も、B君も、C君も来ていたよ。」と、特別で親しみを感じさせると同様である。

作品の冒頭から、一の雷に対する恐怖心が様々な表現によって書かれている。このことで、読者に、一を臆病な少年だと思わせて、のちの、一の自尊心ゆえの悩みを映えさせている。

一は肩をすくめ、勇平に向かって、しょうがないよなというふうには笑っ



てみせた。

「笑ってみせた」ということは、単に「笑った」というよりも、意識して笑ったということがわかる。つまり、一はここでは、本心では笑っていないということがわかる。心の中では、一は雷をとても怖がっているが、その気持ちを隠すため、笑っているように、余裕があるように、勇平にふるまいたかった。「肩をすくめ」という部分もまた、自分の本心を周りに悟られないようにした演技である。

一は唇をかみ、心の中で、一秒でも早く雷が遠ざかりますようにと祈っていた。

一が、自分の無力さを自覚している一文。「雷が早く遠ざかりますようにと祈っていた」という部分が、「雷が早く遠ざかりますようにと言った」と表現するのではなく、また「雷が早く遠ざかりますように」と思った」と表現するのでもなく、「祈っていた」とすることから、人間の力を超越した存在にすぎることしかできない、祈ることしかできない一の姿が映し出されていると解釈できる。一の少年らしい一面。

「唇をかみ」「一秒でも早く」という部分からも、一の、落ち着かない様子がわかる。そして、一は「心の中で」とあるように、このことを決して口に出さないのである。彼の自尊心の強さがうかがえる。

痩せた恵介は、よたよたと倒れそうになる。

ここで恵介が「倒れそうになる」だけで、実際には倒れないという描写は、恵介がみんなの前で堂々と、「自分の弱さ」を言うことができ心の強さ、芯の強さを持っていることを示している。心が折れそうになり、よたよたとなりながらも自分にうち勝つ強さ。「痩せた恵介」

という表現が、見た目の弱さと、心の強さのギャップを引き立てる。

一は、靴をひっかけると、そのまま外に走り出た。

恵介が勇平たちにバカにされていることが、まるで自分に対して言われているようで、その場にいられなくなつた。「ひっかける」「走り出る」という言葉が、あわててその場を立ち去る様子、耐えられなかつた一の様子を表している。

自分の住んでいる町がこんなに美しいとは思ってもいなかった。

「こんなに美しいとは思ってもいなかった」の、「とは」は、「格助詞と十副助詞は」を組み合わせて、強調を表している。その中の「副助詞は」は比較の用法であり、一は今まで見てきたこの町の様子と比較していると考えられる。比較の結果、「自分の住んでいる町はこんなに美しいとは思ってもいなかった」という感情を抱いた。また、「接続助詞で十係助詞も」の用法もあり、ここで「係助詞も」があるので、「一度も考えたことはない」、「全く思っではいなかった」というような、一の驚きがよくわかる。

このように、一は、当たり前だった日常を改めて見てみることで、「こんなにも美しいとは思ってもいなかった」という新しい気づきがあることを知る。「こんなに美しいとは思ってもいなかった」という言葉には、単に「美しいと思っではいなかった」というよりも、もっと強い語感があり、「今までは全くもって想像してなかった世界との出会い」を思わせる。

この描写は、『夏を見上げて』の主題とも関わる。具体的にいうと、それまで一は、恵介を弱々しく、おとなしいやつぐらいにしか考えて

いなかったが、雷の一件で、自分の弱い部分を人に話すことができ惠介の強さに気づく。またそれに伴い、それまで、当たり前前すぎて見向きもしなかった惠介の豊かな作文の才能を再確認し、一は惠介という景色の美しさに改めて感動したのである。

「一は、自分が少し大きくなったような気がした。」

一も人間としての成長をうつつらと感じている。これは、確信したのではなく、「少し」「気がした」とあるように、かすかな自信である。惠介の存在によって、一の心の変化、成長が見られる一文。一のこれからの成長が想像される。

「大声で思いっきり笑いたくなる。」

笑いたくなるというのは、一のすっきりとした心のあらわれ。またそれと共に、小さなプライドに固執していた自分を客観的に見て、そんな自分を笑い飛ばしたくなるというようにも取れる。「大声で」「思いっきり」というのは、心の爽快感と、その気持ちの大きさを表しているのだろう。

「それから惠介と顔を見合わせ、声に出して笑った。」

前に出てきた「笑いたくなる」に呼応している。ほほえんだりするのはなく、声に出して笑うということから、一のすっきりした心情が見てとれる。溜飲が下がったような、そんなイメージが湧く。自分に対して素直になれた瞬間であろう。

夕立に洗われた家も田畑も山々もみずみずしく輝き、美しかった。

夕立は、突発的なものであり、雷を伴い激しい雨が降るが、それは短時間で、その後は晴天が広がる。夕立は、一の心情の移り変わりをあらわし、この小説の主題と強く結びついている。

普段は何気なく感じる日常の風景も、見方を変えれば、美しくも見える。

重なり合った笑い声は風になり、どこまでも、どこまでも響きわたっていくようだった。

これまで話し言葉で書かれていた文体が、最後のこの一文では「風になり」という少しかしこまった書き言葉で書かれている。これにより、最後、小説の全体に締めを与えている。また、カメラワークとして、彼らを写していたカメラが、スーッとズームアウトしていくような印象を読者に与える役割もある。

「重なり合った笑い声」ということから、彼らの心がひとつになったことをあらわしている。ここでは、「惠介のようにさらりと言えたら、みんなの前で堂々と震えることができたら、どんなにせいせいするだろう。」という悩みがすっきりとした一の心情と、「ここ最高の場所なんだ。嫌なことがあると、ここに来てこの風景を見るとすっとするんだよな。」という惠介の心情の、この互いの爽快感をあらわしている。

「響き渡る」ということは、広い場所をあらわし、また「響き渡っていく」ためには、何にも妨害、邪魔されていない必要があり、何かに遮られることのないことをあらわす。この描写では「声」が響き渡るとともに、この時の一の気持ちも響き渡っていくとも考えられる。

「どこまでも、どこまでも」という強調した表現が、その気持ちの永遠性をあらわしている。

以上のことから、一がこの時抱いていた気持ち「この気持ち、何にも邪魔されることなく、この先の人生ですつと続いていくのではないか」と解釈でき、高ぶった感情だったという風に解釈できる。

三 考察

恵介という存在を通して、一が成長していく姿を描いたこの小説は、思春期を迎える中学生を対象とした教材として適しているだろう。

私たちは、人には知られたくない、悟られたくない部分を、みなそれぞれ持っている。ましてや、それを自分から打ち明けることは、とても勇気のいることで、簡単にできることではない。それをどう振る舞い、どう自分の心に抱えて生きていくべきなのか、この小説は、そんなことをわれわれ読者に語りかけてくるようである。

夕立の描写は、大きく捉えると、人生の浮き沈みをあらわしているようでもあり、具体的にみると、一の心情の変化が重ねられているようにも思える。風や雨などの自然物を、人の心情や人生になぞらえて描写する、あさのあつこらしい表現である。

「苦手がいっぱい。でも、得意もちよっぴり」

本文章には三回に「苦手がいっぱい。でも、得意もちよっぴり」がある。初めて出たのは恵介が笑い顔まま、妙なリズムをつけて「苦手がいっぱい。でも、得意もちよっぴり」と言ったところである。ここで、恵介の性格が実は明るくてひょうきんな子、また自分の強いところ、弱いところをよく理解していることがわかる。

また、二つ目のところは、一もまねをして繰り返してみたところで

ある。恵介は苦手がいっぱいなのに、みんなの前で苦手なことも堂々とと言える。反対に、一は得意のことがいっぱいなのに、苦手のこと一つも言えない。一は、そんな自分を嘲笑している感じがする。

最後の「苦手がいっぱい。でも、得意もちよっぴり」は、一がようやく今までの完璧な自分であろうとする自分から、踏み出そうとする第一歩である。自分でも、欠点があることを知り、欠点がみんなの前で言い出すことは恥ずかしくない、これからは堂々として生きていたという決意も見られる。

三つ目の「苦手がいっぱい。でも、得意もちよっぴり」は同じセリフでありながら、一の心の変化、過程が描かれている。

